【エッセイ】

嘆きか願いか疑いか

――辞苑閑話・二――

工藤力男

原発事故はひとごとか

日本語についてかれこれ考えるわたしの生活も半世紀がすぎた。研究者の端くれとして生きてきたので、世上に物議を醸す言語事象についても冷静に対処してきたつもりである。

例えば、「ラ抜きことば」。わたし自身はこれが嫌いであるが、動詞の可能形の単純化を促すという理はあることになる。それと表裏をなす如き「サ入れことば」（一例「議事録を読まさせていただきます」）は、動詞の使役形の単純化であるが、これが日本語の未来にとって有益か否か、わたしは判断に迷っている。

丁寧な表現を心がける人の発話には、一つの述語に対格助詞「を」を続けて用いる「ヲ入れことば」（一例「国民福祉税を創設をいたします」）の出現することがある。心情はわかるが、その表現に理があるとはいえない。日本語構文の理に背くに違いないからである。もう市民権を得たかのように氾濫する「立ち上げる」は紛れもない非文である。理にあわないこの新語を現代人が好んで用いる理由についてはなお考えていきたい。

わたしが住む岐阜県の北西の隣は福井県、その日本海岸には原子力発電所がある。例の福島の事故以来、岐阜県でも放射線について神経質になっている。昨年十二月九日、

朝日新聞名古屋本社版の岐阜県のペイジに、総選挙の「課題を迫う」と題する連載の「2　原発・エネルギー」という署名入り記事があった。敦賀原発で大規模な事故がおきたばあい、放射性物質の飛散について岐阜県が公表したシミュレーションでは、大垣市の中心部で年間の外部被曝量が百ミリシーベルトに達するケースもあったという。同市で生後十一ヶ月の男児と買物にきた主婦にその数値を示して記者が聞くと、「やっぱり怖いかなあ」という返事であった。まるでひとごとのようなこの感想について記者は、主婦が「その結果を知り、声をあげた。」と書いている（これを用例1とする）。嘆きの発言と解釈したのだと思う。

本稿のまとめの段階に入った五月廿三日、日本原子力研究開発機構の加速器実験施設で放射性物質漏れがあった。廿五日正午のラジオのニュースで、報告が遅れたことについて近隣住民の女性が感想をのべた、「連絡がほしいかなと思います」（これを用例2とする）と。

読者諸賢には、右の二つの発言に対して違和感を覚えた人が多いのではあるまいか。そう感じた人は新聞記者の記述には納得したに違いない。そうだとしたら、なぜこの言葉が発せられたのか考えてみる必要がある。

実例いくつか

正確なことは覚えていない。前節の二つに似た発話を耳にするようになったのは五年ほど前からであろうか。今では、例えばラジオ・テレビの音声に耳を傾けていたら、日に二つ三つは必ず得られるだろう。とはいえ、耳に入っても瞬時にきえてしまうので、正確な把握は難しいが、百ほどは書きとめることができた。若干ではあるが、印刷されたものも拾ってある。

その実例をいくつかあげよう。実例には通し番号をつけ、言及箇所には波型傍線を附す。書籍の発行時は元号年と月、新聞・テレビ・ラジオの発行・放送日の年月日を括弧書きするときはアラビア数字による。ともに元号「平成」を省く。

森林の価値と保全を訴える番組、ＢＳ日テレの「森人（もりじん）」(24.8.5) で、ある画家が画学生への希望を吐露した言葉の中に、少なくとも二回これが聞かれた。

3　スケッチしてもらえばいいかなと思います。

4　たくさんえがいてほしいかなあ。

右は疑問表現の形式だが、ともに願望の意らしい。

次は朝のＦＭ放送の「弾き語りフォーユー」の例。

5　そうした思いが伝わったらいいかな、とそんなふうに思います。（25.2.28）

これは3と同じ形だが、謙虚さの表明かもしれない。

ＮＨＫのテレビ番組「ほっとイブニング」で、時代劇への出演を避けてきたのに、ある時代劇に出演した俳優がその理由を語った。鬘なしで侍役が演じられるという条件だったという。その話の中に次の発言があった。

6　カツラ被っていなかったらいいかな。（25.3.6）

3・5とは違うようだ。それなら「かな」は不要である。

昨秋、第一放送の昼の番組「ここはふるさと旅するラジオ」（24.9.26）の中で、天候についてのアナウンサーの言葉である。

7　時おり雲が出るとすずしいかなと思うと、すぐに暑くなります。

これは詠嘆の表現だろうか、願望だろうか。

今年の三月十七日朝は、ごく短い時間に二つの用例を拾った。ひとつは、「日曜あさいちばん」の「季節のいのち」。野鳥のさえずりを紹介する研究者が、野鳥を知るにはどうしたらいいか、という聴取者の質問に答えたものである。

8　探鳥会に参加するのがいいかな、と思います。

これは6と同じ用法かと思う。この人はこの表現が好きらしく、三月三十一日には（植物の新芽も）「魅力的かな」と「いろんな鳥が住めるのかな」があった。これは詠嘆の表現らしい。

十七日のもう一つは、六時と七時のニュース。シドニーで開かれた州の水泳選手権大会、平泳ぎで二着になった日本人選手の感想である。

9　もうちょっといいレースがしたかったかな、という思いはあります。

「という思いはあります」も、スポーツ選手の発言に多いものである。

柔道選手の生の声が、四月三十日朝、ラジオのニュースに流れた。前日の日本選手権大会で優勝し、現役生活に有終の美を飾った人である。

10　心の底から柔道が楽しめたんじゃないかな。

これでは完全にひとごとである。

学者の発話にもあった。三月二十七日「わたしも一言夕

方ニュース」の「ここに注目」に出演した某大学教授、人口減少が続くこれからの社会保険のあり方は

11　厳しいものがあるのかなと思いますよ。

ということであった。

右にあげた十一例のうちの7は、話し言葉のプロといえるアナウンサーの言葉に出現したものである。

最後は、教育テレビの「ららクラシック」（24.9.23）にゲスト出演した常連、書き言葉のプロというべき名の知れた作家の発話である。

12　（四十代・五十代の人は人生の秋を）もっと楽しんで欲しいかなと思いますね。

他の作家の談話にもいくつか見えている。

新種の朦朧体

多くの人が不審をいだいているに違いないこの表現、意外なことに、言及されることは多くなかったようだ。退職して世間が狭くなったわたしが得たのは二つ。一つは、岐阜大学教授の佐藤貴裕さんの教示で知ったブログ「苦言熟考」、いま一つは、水谷静夫さんの著書『曲り角の日本語』（岩波新書　23.4）である。

「苦言熟考」は、Andy Eguchiさんのブログで、その第百六十八回（23.1.13）に、別の事象について述べたついでに触れた記述がある。Eguchiさんは、ＮＨＫの自称「ことばおじさん」が、言葉に関わる番組で「…かな?」を連発するのが耳障りだという。これは、「本当かな」「そうだったかな」などというように、疑問・疑念・不確実さを表わすのが本来の用法だ、と主張する。同感である。このことばおじさんはじつに胡散臭い。

水谷さんは、最終章「日本語の未来図」の【断定したくない「とか」「かな」】の項に、「ある程度言い切っていいところに言い切りを使わない傾向」として数例をあげた。次にひくのがそれで、傍線と括弧がきは原著のものである。13は臓器移植コーディネーターの言葉である。

13　私たちがご遺族にずっと寄り添っていてどれだけの事ができたかは分かりませんが、少しでもお役に立てたらいいかなと思います。〔テレビ番組中〕

次は、国会での答弁に言及したものである。まず大臣の答弁。

14　「この政策を強力に推し進めて景気が好転したらいいかなと思います」

続けて、不正支出を見逃したことを問われた質問に対する、ある組織の会計責任者の答弁、

15 「請求書と書類が整っていて、帳尻も合っているからいいかなと思いました」

をあげて「ガキじゃあるまいし、「いいかなと思いました」と言うことはない」と怒りを露わにしている。激しい言葉がみえるのは、本書が市民講座の講義に基づいており、その講義の空気を伝える編集のせいらしい。

ケータイ小説からもひいている。

16 「ねえ、キスしよッ。」「何よ、あたしそれって無理かも。」

17 「おれ腹減ってるみたい。」

そして、「何でもおぼめかしてそれで霞んでしまう。」と水谷さんは嘆くのである。ケータイ小説なるものを、わたしは見たことがないが、これも日本語の現実の一面なのであろう。16は文末の「知れない」を切りすてただけで、簡単に類推できるが。今年二月の『新刊展望』八百七号（日本出版販売株式会社）に載ったインタビューで、若い女性作家が「かも」による文終止を二ページに三回も用いていた。当面の「かな」も二回出現している。

水谷さんの驥尾に附して書いておきたいことがある。並列の表現には、「AやB」「AとかBとか」「AだったりBだったり」など種々の形がある。近年よく耳にするのは、「Aだったりとか、Bだったりとか」。並列の重複である。これも新種のおぼめかしといえるだろう

現代日本語の「れる／られる」の多用、遂行動詞に「たい」をつけるなど、報道の文章に多くみられる表現を扱って、わたしは本誌二百十五号の「詫びる？詫びない？日本人――日本語雑記・七――」（23.6）で「朦朧体」と名づけたことがある。そのうちの二例を再掲する。

［二重課税］そんな問題意識をもって税調全体を点検する作業が求められよう。

世界最大のイスラム人口を抱える国の民主主義が、安定期に入りつつあることを期待したい。

いま、わたしたちを取りまく日本語は新種の朦朧体だらけである。

ある医師の話から

老人は朝の目覚めが早い。冬は床の中でラジオをきいて夜明けを待つことが多い。去りし二月十八日の月曜日、

「ラジオあさいちばん」をきいていると、「健康ライフ」のコーナーで気になる表現を続けて耳にした。その週は、「治らない病気とどうつきあうか」の再放送、日がわりのテーマによる某医師の話であった。わたしは翌火曜日からは録音したうえ、日本放送協会のホームページでもきいたので、ほぼ正確に文字化することができた。

以下、若干の例をひき、文脈を括弧内に示す。なお、ここに掲げない発話の中に、文末がわずかに長呼されることがあった。水谷さんの著書ではそれが「いいかなぁ」のように、小さな「あ」で印刷してある。

月曜日の【癌とはどんな病気か】で耳にした五つの「かな」のうちの二つ。

18　身近な病気であることを知っている必要があるのかな。

19　イメージを正しく見つめる必要かな。

水曜日は【抗癌剤】に関する話。

20　（新薬について）御理解いただければいいかと思います。

21　（外国では認可されている薬について相談されたとき）余り使わないかなということの方が今は多い。

木曜日は【緩和医療】について。

22　（医師は患者の不安・症状をきいて一緒に考えていく）そこは緩和医療そのものかなと思っています。

金曜日は【健康とは何か】と題して、癌患者の生き方を考える話であった。

23　（患者がそれぞれもっている可能性に）目を向けられる方がいいかなと、それをサポートするのも僕らの仕事かなと思っています。

毎朝六分ほど、しめて三十分の放送中に、わたしの耳に異様に、あるいは不自然に響いたかかる表現が十三あった。内訳は、「かな」八、「のかな」四、「か」一である。謙虚で誠実なお医者さんなのだろうと思うが、これでは余りにも頼りない。この医師は勿論、再放送までしてきかせたディレクターこそ、言語脳が重症なのかな。

音声と字幕

半ば隠者ぐらしのわたしに、放送以外の音声資料は得がたいが、たまに見るテレビは、字幕によって興味ぶかい材

料を提供してくれることがある。当面の主題についてもそれがある。

その一。名古屋テレビは夕方のニュースで、岐阜県海津市清水池の「ハリヨ生息地」の天然記念物指定を報じた。カメラはその池の近くの住民に話をきいた。その住民は、

24　（見物人が多くなると）、あまりよろしくないのかな。（24.8.2）

と答えた。画面にはその発話のとおりの文字が映った。

その二。過ぎし三月二十五日の「ほっとイブニング」をぼんやり見ていると、「家訓」をめぐる放送があった、一つは、長野県佐久市の旅館の当主が、他県の鯉ヘルペスの影響で客足が激減した経営危機を、家訓を守って克服した話である。その中に「家訓は大切なのかな」という趣旨の発言を繰り返し、字幕も同じであった。正確には文字化しえないが。

その三。日本維新の会が開いた公開討論会（24.9.9）の様子を、中京テレビは翌日夕方のニュースで報じた。会のあとで報道陣に感想をとわれた、いま同党国会議員団幹事長の返答は、

25　おおむね一致したのかな。

で、字幕の結びの部分は「したかな」となっていた。「の」だけ削って文字化したのである。発言者は紛れもない当事者、同党のキーマンである。テレビ局のディレクターとも何を考えているのだろう。

その四。名古屋駅と名古屋港の間に、あおなみ線という鉄道路線がある。変わったことが大好きな市長がここに蒸気機関車を走らせて物見猛き多くの人を集めた。それを放送した東海テレビの夕方のニュースで、今後も続けるかどうか問われて担当の部局長が答えた。

26　（莫大な費用を要するので）大きな課題があるのかなと認識しています。（25.2.14）

字幕には「のかな」がなかった。放送局の見識である。

その五はBS放送のショップチャンネル。じっくり見れば確実な材料が多く得られると知ったが、それに付きあうのはつらい。三月二十五日午後、某社のサプリメントの宣伝には、四国のある札所近くのうどん屋で取材していた。元気にはたらく若主人はその秘訣を尋ねられて、

27　○○のおかげで元気が続いているかなと思います。

と答えた。字幕では「かな」が消えていた。

それぞれの放送から、番組製作者の姿勢が読みとれる。24はその発話に疑念を感じていないことを、25は若干の疑念らしいものを、26・27からは疑念ないし批判である。

動詞と「かな」

手にした実例は多くないが、考える材料としては十分な数だと確信する。これがなぜ違和感を抱かせるのか、いろいろな状況を設定して考える。初めは動詞と「かな」の関わり。

わたしにはその趣味がないが、競馬場で馬券を握っている常連客を想定しよう。当てずっぽうで馬券を買ってレースを見ながら「きょうは当たらないな」と呟いたら、ごく自然な発話であろう。言わば、当たらない現実の受容、諦めである。

いつもの半分ほどの情報で馬券を買ったら、「28　当たらないかな」とでも言うだろうか。これは二義的である。というのは、「当たるかな、当たらないかな」と言っているに等しいからである。一義は「当たらない」方に傾き、他の一義は「当たる」方に傾いていると言える。この二義は音声に現われることが多い。すなわち、文末の音調と、長呼するか否かとである。「な」が上昇調なら、いぶかしみか軽い疑いが含まれ、末尾が「なあ」と長呼されて下降調で実現したら、期待や願望の表明である。そして、前者は「やっぱり」、後者は「何とか」を伴うと、意味がはっきりする。

「かな」に「の」が加わった「のかな」は何を表現するのだろうか。実際の発話を想定することは容易でない。やはり競馬場の状況で29を作ってはみたが、その意味は分からない。

29　十番レース、当たらないのかな。

この作例が有効な発話であるためには、その原因や背景を問う「なぜ／どうして／本当に」などの語が必要だ、というのがわたしの語意識である。それなしに29が理解できないのは、20・26・27・28を不可解と判断する語意識そのものである。

それが自分だけの語意識ではないことを確かめる必要がある。上引の水谷さんが実質的な編集者である『岩波国語辞典』第七版から引く。他の辞書の記述もほぼ同様である。

かな①《連語》疑問を込めた詠嘆を表す。「何かいい

ことない―」「わしの言葉が信用できない―」▽終助詞「か」＋間投助詞「な」。「かなあ」とも言う。この用法は江戸時代後期に一般化したといわれているが、その淵源は古代語にある。

萬葉語「ぬか」「ぬかも」

前節に古代語とかいたのは、正確には萬葉集の歌である。現代語の「ないかな」に相当する萬葉語は「ぬか／ぬかも」である。

甲　もののふの岩瀬の杜のほととぎす今も鳴奴香山の常蔭に（1470）

乙　皆人の命も我も三吉野の滝の常磐の常に有沼鴨（922）

甲の第四句は「今こそ鳴いてくれないかなあ」、乙の結句は「永久不変であってくれないかなあ」と口語訳されている。願望である。ここで、ヌカ・ヌカモの表記は、漢字の音訓を借りた「奴香」「沼鴨」である。ほかに「糠」「額」「宿鴨」「濃香毛」などもある。さらに左記の歌、

丙　霞立つ春の永日を恋ひ暮らし夜も更けゆくに妹相鴨（1894）

「妹は逢ってくれないものかな」と口語訳される結句の原文には、「ぬ」に当たる表意・表音いずれの文字もないのである。甲・乙・丙の当該箇所は願望の表現である。

一方、ヌカモのヌが否定の正訓字「不」で書かれる萬葉歌が多数ある。

丁　一日には千度参りし東の大き御門を入り不勝鴨（186）

結句は「入りかねることよ」と口語訳されている。否定の事態についての詠嘆である。

甲・乙・丙のように、願望を仮名で書いたり文字化を省いたりすることはあるが、詠嘆をそのように書く例はない。萬葉時代の日本人が願望表現のヌカ・ヌカモのヌに否定の意味を意識することがなかったわけである。それは、現代のわたしたちが、「宝くじ当たらないかな」「一雨来ないかな」「帰りに一杯やりませんか」というときの「ない／ん」に否定の意味を感じないのと同じであったと考えることができる。

形容詞と「かな」

手もとの実例は、「怖い」「ほしい」「したい」「すずし

い」など、形容詞類が圧倒的に多い。その中でも特に目だつ「いい」を中心に考えることにするが、その前に、「いい」がまともな形容詞ではないことを述べる。

日本語の形容詞には、ク活用形容詞とシク活用形容詞があり、それが属性形容詞と感情形容詞にほぼ対応することは、日本人なら少なくとも高等学校までに学ぶ。なお、実例1の「怖い」はク活用なので、「あの犬は怖い」のように属性形容詞として機能するが、この用例のように感情形容詞としても機能する、両面的な形容詞だということができる。

「いい」は何活用かと問われたら、多くの人は困惑するに違いない。そんなこと、学んだ経験も考える機会もなかっただろう。そこで、この語の活用を確認しておこう——「＊あすは天気がいかろう／＊天気がいくて／天気がいい。／天気のいい日／＊天気がいければ」。以上、未然形から仮定形までのうち、活用形があるといえるのは、終止形と連体形だけである。換言すると、語形が変化しない語である。ここに詳細を記すわけにはいかないが、「いい」は、形容詞の語音構造の制約によって、発達が止まってしまった特殊な形容詞なのである。

本稿の考察にはそのことを知っているだけで十分である。

A　この洋服はデザインがいい。

B　きのうよりずっと気分がいい。

特別な条件がなければ、Bの「気分がいい」人は話し手自身である。ひとつ形容詞「いい」ではあるが、Aでは属性形容詞、Bでは感情形容詞として機能していることになる。Bの表現性は、「娘に先立たれて悲しい」などの典型的な感情形容詞となんら変わるところがない。話し手自身の感情表現だからである。

「あのカットグラス、高いかな」と自問したり誰かに尋ねたりする。「どうしてこんなに高いのかな」と呟くこともある。「高い」は属性形容詞である。「母が死んで悲しい」のは当然の人情だが、話し手自身の気持ちを「母が死んで悲しいかな」と言う人のあるはずがない。さらに「の」がついた「母が死んで悲しいのかな」は、他人が抱く感情であるのが普通だろう。

多くの実例について強い違和感を覚えた「の」は極めて重い。かかる「の」は、準体助詞／形式名詞と称せられる。江戸時代初期に生まれ、日本語の論理性と明晰性を高

めた優れものである。だが、耐用年数が来たのか、近年はまともに使われないことが多い。それについて、わたしは五年前、本誌二百四号に「悩ましき〈の〉――言語時評・十九――」をかいた。「の」の衰退には、さらに拍車がかかっている感じで、多くの日本人にはその差が意識されていない。一連の記述の同じ構文なのに、「の」を入れたり省いたりした日本語文法学会会長もいる。

嘆きか願いか疑いか

「日曜あさいちばん」というラジオ番組、二月二十四日の「日曜訪問」では、「越後ゆきかき道場」を七年間ひらいている代表者Mさんを訪問した。雪かきボランティアは、Mさんのもとで一時間ほどの講義を聴いてから作業にかかる。Mさんは、彼らの作業を見て、講義が有効であることを実感するのだという。そんなことを話したあとで次の発言があった、「やっぱり座学は必要なのかなあ」と。あれ？　変だぞ。これは、座学なしで作業をさせて、それが失敗だと感じたときに発する言葉ではないのか。

以上、全て話しことばの実例であって、さすがに書きことばには見なかったが、昨年八月十九日の朝日新聞第一面の広告欄で『うちの子、言葉が遅いかな？』という書名を目にした。変な題だなあと見ると、副題「どんどん言葉が増えていく遊び方」があり、「小学校に上がる前に知的能力をしっかり育てる！」などの宣伝文もついている。

自分の子どもについて、「言葉が遅いかな？」と疑うなど、よほどのことがなくては考え難い。例えば、妊娠中に服用した薬が胎児の言語脳に悪影響を及ぼす恐れがあると知った時などに限られるだろう。喃語期になっても言葉を発しない傾きがあったりしたときは、「うちの子、言葉が遅いのかな？」という不安になるだろう。ここには「の」が必要で、「遅いかな」と「遅いのかな」は全く違う疑念のはずである。

その本を読んでみることにした。岐阜県内の公共図書館の蔵書をネット検索すると、四割近くの館が収蔵しており、高い収蔵率にハウツー物の強みを知った。A四判百四十ページ、半分はイラストで、「はじめに」の章に「うちの子、ほかの子とくらべて話すの遅いかな？」と出ている。これが書名の基になったようだ。「1歳半を過ぎて「言葉が遅いかな……」と思ったら、以降に紹介されている遊びをすぐに始めてください。」（p.68）ともある。こち

らはいかにも「の」が足りない。その一方で、「実際に支援を始めてみると治ってしまう子が多いというのは、脳の障害で治らないといわれる子と異なるタイプであるといえるのかも知れません。」（p.25）には余分な「の」がある。紛れもなく書き言葉として用いられた例である。著者こそ言葉の発達が遅れたのかな。

四月二十七日夜、ＮＨＫのテレビドラマ「ご縁ハンター」の最終回をみていた。近年とかく話題になる、いわゆる婚活をする結婚願望の男女を描いたものである。意外な収穫があった。問題の「かな」と「かも」が多く聞かれたのである。少なくとも七回耳にした。「なにげに」も聞こえた。脚本の後藤法子さんが特に意識して台本に盛ったのだろう。

もう四半世紀の昔になる。語句や文の末尾を上げるおかしな話し方が大流行した。テレビ放送で拡がったのだろうが、あの奇妙で不快な話し方を受容する素地が、日本語列島にどのように作られたのか不思議である。疑問に似て疑問ならぬその話し方は「半疑問」と呼ばれた。どんな流行にも限りがあるらしく、さしもの「半疑問」も近年は減少傾向にある。いま急速に拡大している「かな」「のかな」はその間隙を埋めようとしているのかも知れない。

この表現は五年ほど前に耳についた、と先に書いた。が、先日スクラップ帳に貴重な一点を見つけた。平成八年四月六日の毎日新聞夕刊の「ちょっとひとこと」欄にのった、大岡信「語尾で逃げをうつ陰険な表現法」という短文である。大岡さんは、日本語に腰をすえてしまった表現法を指摘している。それは、会話の尻尾に微妙な小細工をする方法で、「お礼を申しあげたいと思います」「まあそんな感じ」、職業を問われて「建築関係です」と応ずる類いである。その稿末には、近ごろ気持ち悪く感じている新流行の語尾表現があるとして、「考えることができるのかな、と思います」をあげている。

これによると、廿年ほど以前、半疑問と共棲する形でうまれた表現が、近ごろ急速に増殖したことになる。意外にしぶといこの表現はどう名づけたらいいだろうか。

（平成廿五年六月五日芒種）